

一番気乗のする時

芥川龍之介

青空文庫

僕は一体冬はすきだから十一月十二月皆好きだ。好きといふのは、東京にゐると十二月頃の自然もいいし、また町の容子ようすもいい。自然の方のいいといふのは、かういふ風に僕は郊外に住んでゐるから余計よけいそんな感じがするのだが、十一月の末すゑから十二月の初めにかけて、夜晩おそく外からなんど帰つて来ると、かう何なんともしれぬ物の臭におひが立ち籠こめてゐる。それは落葉おちばのほひだか、霧のほひだか、花の枯れるにほひだか、果実の腐くされるにほひだか、何んだかわからないが、まあいいにほひがするのだ。そして寝て起きると木の間まが透すいてゐる。葉が落ち散つたあとの木の間まが朗ほがらかに明あかるくなつてゐる。それに此処ここらは百舌鳥もずがくる。鶉ひよどりがくる。たまに

鶺鴒せきりいがくることもある。田端たばたの音無川おとなしがはのあたりには冬になると何時いつも鶺鴒せきりいが来てゐる。それがこの庭までやつてくるのだ。夏のやうに白鷺しらさぎが空をかすめて飛ばないのは物足りものたないけれども、それだけのつぐなひは十分あるやうな気がする。

町はだんだん暮近くなつてくると何処どこか物々しくなつてくる。

ざわめいてくる。あすこが一寸ちよつと愉快だ。ざわめいて来て愉快になるといふことは、酸漿提灯ほほづきぢやうちんがついてゐたり楽隊がゐたりする

のも賑にぎやかでもいいけれども、僕には、それが賑かなだけにさういふ時は暗い寂しい町が余計眼よけいにつくのがいい。たとへば須田町すだちやうの通りが非常に賑かだけれど、一寸ちよつと梶町かぢちやう青物市場あをものいちばの方へまが曲るとあすこは暗くて静かだ。さういふ処を何かの拍子ひやうしで歩い

てみると、「鍋焼なべやきだとか「火事」だとかいふ俳句の季題を思ひ出す。ことに極ごくくおしつまつて、もう門松かどまつがたつてゐるさういふ町を歩いてゐると、ちよつと久保田万太郎君くぼたまんたらうの小説のなかを歩いてゐるやうな気持でいい気持だ。

十二月は僕は何時いつでも東京にゐて、その外ほかの場処ばかといつたら京き都ととか奈良ならとかいふ甚はなはだ平凡な処はしかしらないんだけど、京き都とへ初めて往いつた時は十二月で、その時分は、七条しちでうの停車場も今より小せまさかつたし、烏丸からすまるの通とほりだの四条しでうの通とほりだのがずつと今より狭せまかつた。でさういふ古ぼけた京都を知つてゐるだけだが、その古ぼけた京都に滞在してゐる間あひだに二三度時雨しぐれにあつたことを

おぼえてゐる。殊ことに下賀茂しもかもの糺ただすの森であつた時雨しぐれは、丁度ちやうど朝焼
がしてゐるとすぐに時雨しぐれれて来たんで、甚だ風流ふうりゆうな気がしたのを
覚えてゐる。時雨しぐれといへば矢張りやは其時、奈良ならの春日かすがの社やしろで時雨しぐれに
あひ、その時雨しぐれの霽はれるのをまつ間あひだお神楽かぐらをあげたことがあつた。
それは古風こふうな大和琴やまとことだの箏さうだのといふ楽器がくを鳴らして、緋ひの袴はかま
をはいた小さな——非常に小さな——巫女みこが舞まふのが、矢張りやは優やさ
美うだつたといふ記憶きおくがのこつてゐる。勿論もちろん其時分ときは春日かすがの社やしろも今
のやうに修しう覆ふくが出来できなかつたし、全体ぜんたいがもつと古ふるぼけてきたな
かつたから、それだけよかつたといふ訣わけだ。さういふ京都きょうととか奈
良ならとかいふ処ところは度々たびたびゆくが、冬ふゆといふとどうもその最初の時ときの記
憶おぼえが一番鮮あざやかなやうな気がする。

それから最近には鎌倉かまくらに住つて横須賀よこすかの学校へ通ふかよやうになつたから、東京以外の十二月にも親しむことが出来たといふわけだ。その時分の鎌倉は避暑客のやうな種類の人間が少いだけでも非常にいい。ことに今時分の鎌倉にゐると、人間は日本人より西洋人の方が冬は高等であるやうな気がする。どうも日本人の貧弱な顔ぢや毛皮ぐわいたうの外ぐわいたう套おとがひうづの襟おとがひうづへ頤おとがひうづを埋めても埋め榮ばえはしないやうな気がする。東清とうしん鉄道あたりの従業員は、日本人と露西亞ロシア人とで冬になるとことにエネルギーの差が目立つといふことをきいてゐるが、今頃の鎌倉を濶くわつぽ歩くわつぽしてゐる西洋人を見るとさうだらうと思ふ。

もつとも小説を書くうへに於ては、寧ろ夏よりは十一月十二月もつと寒くなつても冬の方がいいやうだ。また書く上ばかりでなく、書くまでの段取を火鉢にあたりながら漫然と考へてゐるにはいまごろ今頃が一番いいやうだ。新年号の諸雑誌の原稿は大抵十一月いつぱい一杯または十二月のはじめへかかる。さういふものを書いてゐる時は、他の人は寒いだらうとか何なんとかいつて気にしてくるけれども、書き出して脂あぶらが乗れば煙草を喫のむほかは殆ど火鉢なんぞを忘れてしまふ。それにその時分は襖ふすまだの障しやうじ子だのがたて切つてあるものだから、自分の思想や情緒とかいふものが、部屋の中から遁出にげだしてゆかないやうな安心した処があつてよく書ける。もつともよく書けるといつても、それは必ずしも作の出来栄えには

比例しないのだから、勿論新年号の小説は何時も傑作が出来るといふ訣わけにはゆかない。

(大正六年)

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

一番気乗のする時

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>